

書評 02

飯田泰之・木下斉・川崎一泰・入山章栄・林直樹・熊谷俊人著

『地域再生の失敗学』

光文社 / 2016 年 4 月刊 / 301 ページ / 840 円 + 税
ISBN 978-4-3340-3915-8

評者：谷本 貴之
愛媛大学社会共創学部准教授



本書は、近年各方面で喧伝されている「地域再生」というテーマについて、経済論壇で活躍する飯田泰之氏（マクロ経済学）を編者として、地域の最前線で奮闘する実務家や気鋭の研究者の講義や対談を交え、従来の地域再生策の問題点を整理しつつその改善に向けた視点を提供しようとするものである。

さて、「地域再生」という言葉は何かしら耳に心地よく、安易に用いられるきらいがあるが、本書ではまずそれを次のように定義する。すなわち「地域」とは「中心となる都市と、その都市に通勤・通学する人口が一定以上いる周辺地域を合わせたもの」であり、具体的に「人口 10 万人以上の市の中心街とその通勤圏」が想定される。そしてそうした「地域における平均所得が向上することをもって『再生』と呼ぶ」。

本書全体を貫く問題意識は、「これまでの国や自治体主体の振興策の失敗から学び、民間主導で地域経済に再び活力と成長を取り戻す」ことにある。各章は上記の論者らによって、それぞれの立場から議論が展開される。

第 1 章「経営から見た『正しい地域再生』」では、民間の立場で地域再生に携わる木下斉氏と飯田氏との対談を通じて、民間主体で行う地域再生策が議論される。とくに「いかに『稼げるまち』にするか」という視点が重視され、そのために自治体や地域活性化事業に、収支や投資とリターンの発想を取り入れるなど、経営的な観点から地域再生策が論じられる。

第 2 章「官民の新しい戦略」では、川崎一泰氏（地域経済学）が、地域再生における官民連携について考察する。論点は多岐に渡り、都市の最適人口規模（20～30 万人）や、産業連関表などを活用した地域経済の特徴に沿う経済循環促進とその際の民間投資の重要性が示される。また PFI など官民連携制度の問題点が整理されるとともに、欧米の諸制度が紹介される。

第 3 章「フラット化しない地域経済」では、入山章栄氏（経営学）が地域におけるアイデアとイノベーション創出について議論する。彼によれば、地域の稼働力を決定するのは人と人が相互にコミュニケーションすることで発揮されるクリエイティビティや信用であり、それゆえ地域経済の再生にはフェイス・トゥ・フェイスのインタラクションにより、地域内でクリエイティブな発想を生みやすい環境を整備することが必要だという。

第 4 章「人口減少社会の先進地としての過疎地域」では、林直樹氏（農村計画学）が「自主再建型移転」を提唱する。これは主として生活に不便な山間地から麓や小都市周縁部への集落移転を指す。その利点には日常生活の利便性向上や医療へのアクセス向上、自然災害への不安軽減、地縁の維持などがあり、かかる手法は限界集落以外の地域政策にとっても、人口減少下で地域再生が無理となった場合にもなお選択肢が残されていることを示唆している。

第 5 章「現場から考えるこれからの地域再生」

では、千葉市長の熊谷俊人氏と飯田氏との対談を通して本書が総括される。とりわけ熊谷氏の市長としての経験から、地方が「東京にないもの」を生み出すことや、官民間で雇用を流動化し両者の架け橋となる人材を育成すること、「地域が元気であるための条件」は「行きたい街」となることなどの重要性が示される。

以上各章の概要を示したが、以下では本書全体の特徴について、とくに筆者の専門（マーケティング論）との関わりで、経営やマーケティングの観点から指摘しておこう。

第1に、本書の書名通り「失敗」への着目である。経営学にせよ地域再生論にせよ、取り上げられる事例は一般に成功例が多い。地域再生論ではそこで陥りがちな問題に焦点を当てた類書も近年存在するが、やはり多くは商店街や観光地の活性化、地域産品のブランド化などの成功例に着目する。もとよりそうした優れた諸事例から成功要因を抽出し、他に活かそうとすること自体は望ましい。しかし一口に「成功」といってもその判断基準が恣意的で、当事者にとって都合のよい一部の局面を強調したものである恐れは否定できない。そうした意味であえて「失敗」に着眼しその要因を追求しようとする本書は、地域再生に関する従来の議論を相対化し、再生実現に至る方策を多角的に捉える視点を提供する。また、「失敗学」の畑村洋太郎氏は、成功話からつくり出せるものは結局マネでしかないのに対し、失敗話は人と同じ失敗をする時間と手間を省き、前例の1ランク上の創造の次元から企画を開始できると述べるが、これは地域再生においても同様のことが期待できよう。

第2に、経済的・経営的視点の重視である。地域再生の議論は、ともすれば地域住民が「元気」や「誇り」を取り戻すことなど情緒的な側面で語られることがあるが、本書では地域再生には「経済」の活性化が最重要課題とされる。そしてそのために、収支やコスト・ベネフィッ

トの視点、「誰を相手にどうやって稼ぐのか」というマーケティングの視点、他の地域との競争意識を持つべきといういわば競争戦略の視点などが強調される。これらはいずれも企業経営の立場からは自明のことにすぎないが、行政を中心にさまざまな主体が携わる地域再生の現場ではなおざりにされることがあり、それゆえ絶えず意識しておくべき点となろう。

第3に、多様な学問的素養を持つ論者が議論に加わることで、地域再生論に新たな知見を付加している点である。第2の点にも関連するが、例えば木下氏の、地域活性化へサプライチェーンの考え方を応用し、原材料の調達から製造や加工、流通という連鎖のなかで自らの関与する部分をいかに長くするかという発想は、「6次産業化」など類似する概念はあるものの新鮮な議論で、地域の産業や商店経営にも十分応用しうられると思われる。また入山氏は、組織学習や脳科学の諸成果も援用しつつ、いわゆる知識労働者には、多様な人と偶然出会う非公式な場も含めた知の集積した環境（大都市）と、その周辺で脳をリラックスさせひらめきを得られる環境（地方部）の双方が重要だとする。現状後者への論及は浅く素朴な指摘にとどまるが、人と人との交流とそこで創発される知識、またアイデア発想という点から地域再生を捉える視角は、箱物に依存しないこれからのまちづくりを考えるうえで示唆に富むものといえよう。

以上のような特徴を有する良書であるが、紙幅の限られた新書を複数の異なる領域の論者が分担するという構成上、各章の議論は必ずしも深く掘り下げられているわけではない。また各論者が再生の対象として認識する「地域」の概念にも多少の違いはあるようである。その意味では、本書は地域再生の実情を鳥瞰するための取っ掛かりとして捉え、そのうえで読者がとくに興味を持つ領域、例えば商店街活性化なり、まちづくりなり、官民連携なりについて、さらに関連書で理解を深めていくとよいだろう。